

研究余滴

新井 郁男
上越教育大学名誉教授

学校がわかるとは？

平成18年3月末をもって放送大学を定年退職し、出勤日、出勤時間といったものに制約されない比較的自由的な身となった。5年前に上越教育大学を定年になってから2度目の定年である。大学を出て文部省調査局調査課外国調査係を振り出しに、国立教育研究所、東京工業大学、上越教育大学、愛知学院大学、放送大学と勤め先が変わったが、それに伴って、研究のほうも変遷してきた。文部省で勤めた係は明治時代の学制取調掛のようなところで、今日のが国の比較教育研究者にはそこで仕事をした者が多いが、わたしはそこで主として資料・文献による英米の教育事情調査に従事した。さらに1962年に東京で開催されたユネスコ主催のアジア文部大臣会議で事務局スタッフとして資料の作成などの仕事をしたことがきっかけで、タイの首都バンコクにあるユネスコ地域事務所で、アジア諸国の教育計画策定のための統計データの整理の仕事にかかわったことから、アジア、とくにタイの教育に興味を抱くようになった。日本でアジア文部大臣会議が開かれたことなどを機縁に、国立教育研究所にアジア教育研究室が新設されたため、早速応募し、アジアの教育、特にタイの教育についての研究に専念した。後に日本の教育計画研究室に異動し、日本も含めた教育行政計画の研究にも携わったが、縁あり、東京工業大学に移

り、教員養成にかかわるようになった。

それを契機にして、日本の初等、中等学校の教育に研究の焦点がシフトすることになる。教師教育の新構想大学院として新設された上越教育大学に職を得たのも、そうした研究を深めたいと思ったからである。上越に行くまでも、学校の教員を対象とした講演をしばしば行っていたが、先生は学校現場をまだよくご存じないから、といった皮肉めいた感想を聞かされることが多かった。それからアウトサイダーであることには変わりはないにしても、学校での実践を折あるごとに観察させてもらうよう心がけるようになった。また、上越教育大学では現職の教員から話を聞く機会が多くなり、次第に学校という小さな世界が、かなり見えるようになってきた。また、教師といえども、自分の経験した、あるいは勤めている学校についてはわかっているが、他の学校、他県の学校についてはわかっていない、ということもわかってきた。授業の一環として、学校における時間についての実態調査を行ったことがあるが、質問紙を作成する過程で、学校や地域が違っていると用語の使い方まで違うことがあるというようなことも、現職教員である学生たちにとってあらたな発見であったということは、わたしにとってもあらたな発見であった。

こうして学校の内実が少しずつ見えてくるにつれ、学校の調査がいかに難しいかということもわかってきた。専門分野である教育社会学では、これまで社会調査という形で、学校や地域を対象にしたさまざまな調査が行われてきたが、ほとんどは学校の中は

ブラックボックスとして扱われてきた。近年は、学校の中についての質的研究も増えてきてはいるが、はたして学校をどれだけ理解しているのか、という疑問を抱かざるをえないことが多い。

しかし、学校が「見える」とか「わかる」というのはどういうことなのか。学校のなかにいる者は学校をわかっており、学校の外部にいるものには所詮学校は見えないのだろうか。学校のなかにいる者に見えている状況は、あくまでもその人の立場、意識や価値観、経験などによって形成された眼鏡を通じて見える事実にすぎないのではないだろうか。また、わたしは、徐々に学校が見えるようになった、と偉そうなことを言ったが、それはわたしがこれまでに見たり、聞いたり、読んだり、調べたりしたことなどによって形成された自分の眼鏡を通して見える事実であり、それも一つの事実である。

事実というと、個々人の外部に客観的に存在するという意味での事実、デュルケイムの言う社会的事実を考えるのが一般的かもしれないが、ニュースが記者や報道機関によってつくられるのと同じように、学校についてのさまざまな事実も、何らかの眼鏡によってつくられているというべきである。重要なことは、その眼鏡がだれのものなのかを見定めることであろう。

こんなことを考えながら、やりたかった、また、これまで手をつけながら中途半端になっている研究を、ほそほそながら続けようとしている昨今である。